



新年のご挨拶

松下 幸雄*

昭和 59 年の新春を迎えるに当たつて、私は会員の皆様に新年のご祝詞を申し上げますとともに、本年も引き続き倍旧のご支援をお願いしたいと思います。

さて、昨年の本会誌 1 号の冒頭で会員諸兄に諸般の業務をご報告するとともに、所感の一端を申し述べましたが、幸いにして当協会事業はおおむね順調に推移し、年度当初の計画も着実に遂行されておりますことはご同慶の至りです。ここで、私は昨年を回顧するに当たり、当協会事業の主要な柱の一つである春秋の講演大会におけるご挨拶の要点を復習して、業務経緯のご報告に替えたいと思います。

まず、第 105 回講演大会（併せて第 68 回通常総会）におきましては、「……鉄鋼業における技術者、研究者の確保、ならびに人材育成には、なおいつそうの努力が望まれます。私はこの点において、日本鉄鋼業を技術面から支える学会として、当協会の責任の重大さを痛感するとともに、基礎研究の充実と、生産に適應する新技術の開発にいつそうの努力を続けなければならないと考えております。当協会はこのような考え方のもとに、従来から共同研究会、特定基礎研究会、鉄鋼基礎共同研究会、各種研修事業等あらゆる事業を通じて技術の向上と人材育成に努めて参りました。……」のごとく述べた後、以下の 3 点を付け加えて会員諸兄のご協力を期待致しております。

(1) 昨年末（昭和 57 年末）、10 年振りに実施した会員アンケートの結果を尊重し、これを仔細に分析して和文会誌、講演大会などの将来像を考えてゆきたいと思います。

(2) 講演大会は先刻申し上げましたとおり、年ごとに盛況を呈しておりますが、いわゆる大手企業を中心とする従来型に加え、なおいつそう幅広い階層からの発表を期待したいと思います。

(3) 現在、学生会員数は総数の 3% にも満たず、外国会員数にも及ばないのは、たいへん残念であります。後継者育成も兼ね、学生会員の勧誘に大いに努力したいと思います。

ついで、第 106 回講演大会におきましては、「……当地（秋田大学）で秋季講演大会が開催されますのは実に 22 年振りであります。当時は当協会が故浅田長平会長のもとに事業拡大強化への新規構想をまさに打ち出さんとした時期でありまして、講演数も百数十件に過ぎませんでした。これに対し今回は、833 件の多きを数え、その内容も基礎から応用にわたり時代の要請に応えるとともに将来への指標を示す意欲が伺われ隔世の感がありご同慶に存じます。……」と述べ、春季講演大会ご挨拶の前記項目(1)については、「……当協会はすでに会誌“鉄と鋼”本年（昭和 58 年）7 号に報告致しましたように、会員アンケートの結果を尊重して講演大会の意義、構成および運営などにつき、会員諸兄のご支援を得ながら検討を重ねいつそうの充実に努める所存でございます。……」のご報告しております。なお、結びとして「昭和 60 年 2 月には創立 70 周年を迎えますので、これを機にさらに清新な飛躍へと踏み出すために会員諸兄のご協力を期待致します。」と述べております。この件につきましては、すでに企画、編

* 本会会長 東京大学名誉教授 日本鋼管(株)顧問

集両委員会を中心に有意義な行事を実施できるよう着実に準備が進められております。

先刻、当協会の年度当初の事業計画が着実に遂行されていると述べましたが、その回顧と展望につきましては、伊木常世共同研究会幹事長による別掲記事をご参照いただくこととして、ここでは国際交流のみにとどめておきたいと思っております。本件もいずれ、各責任者からそれぞれ報告されますので、私としては協会業務運営上、将来の視点をどのように定めるかを考えてみたいと存じます。ご承知のように、昨年は2国間学術交流が4件実施され、その半数は先方に使節団を派遣し、残り半数は先方の使節団を受け入れております。

前者は、ソビエト連邦とチェコスロバキアであり、その使節団団長としてはそれぞれ、川合保治九州大学教授、加藤健三大阪大学教授を煩わしました。ソビエト連邦の責任団体は、科学アカデミー (Physico-Chemical Bases of Metallurgical Processes, Scientific Council) であり、当協会の的場幸雄元会長と科学アカデミー会員故 A. M. Samarin 博士(当協会名誉会員) とのお力添えで 1967 年 5 月以降、日ソ製鋼物理化学シンポジウムとして発足致しました。これは隔年、相互に受け入れますので今回が第 9 回に当たり、すでに 15 年を超える歴史を持つておりますが、先方の責任者は科学アカデミー会員 N. V. Ageev 博士 (当協会名誉会員) を経て、現在は同準会員 A. I. Manochin 博士へと変わっております。当協会の場合、原則として、ある時期の使節団団長が次回受入れ時の実行委員会委員長を努めることになっており、これは他の 2 国間交流についても同様であります。さて、本シンポジウムは、前記の名の示すとおり主題の大枠が決まっております、その都度主眼点を双方で協議するのですが、私は "Give-and-take" の原則はもとよりのこと、双方の学術的、技術的ポテンシャル、熱意と寛容の精神がお互いにかみ合つてこそ有意義なシンポジウムが実現すると考えております。また、これは以下の 2 国間交流に関しても同じことがいえると確信致します。

つぎに、日本・チェコスロバキア合同シンポジウムですが、本件は当協会作井誠太元会長、田畑新太郎前専務理事がプラハで同国政府機関と懇談されたのを契機に、1977 年 3 月以降当協会の公式行事となり、東京を手始めに隔年ごと両国で開催され今回で第 4 回を数えました。先方の責任団体は、The Iron and Steel Industry General Management, Prague (総裁: J. Březina 氏) および The Vitkovice Concern, Ostrava (社長: R. Peška 博士) ですが、このシンポジウム主題は従来とも広範に過ぎて焦点が曖昧になる恐れがありました。これは、当協会としても十分反省して将来の姿を模索中ですが、たとえば製鋼、連続铸造、圧延加工、材料の性質、原子炉材料などなどのテーマを 1 回のシンポジウムでまとめて討論することは不可能であり、また本来の意義を逸脱する恐れもあります。しかし、この問題は当方の基本姿勢を基に先方との協議を繰り返しながら解決してゆくべきことでしょう。折にふれ、広く会員諸兄のご意見をお寄せいただきたいと思いますと思っております。

さて、受入れのシンポジウムとしては、対オーストラリアおよび中国の二つが開催されました。前者は、1980 年 7 月シドニーで開催の日本・オーストラリア Extractive Metallurgy Symposium の答礼として実施されました。前記シンポジウムは、当協会と日本鉱業会が帯同して、併せて約 60 名にのぼる使節団が同国を訪問しましたが、その受入れはオーストララシヤ鉱山冶金学会 (The Australasian Institute of Mining and Metallurgy, 略記は Aus IMM) およびオーストラリア科学アカデミーで、先方の緻密な配慮と温かい歓待を受けました。今回当協会としては、鉄部門と鉱山・非鉄部門の合同には無理があると考え、日本鉱業会と Aus IMM (鉱山・非鉄冶金を主題とする)、当協会と Aus IMM (原料炭、コークス、製鉄原料の事前処理、製鉄を主題とする) の 2 本建てシンポジウムとし、いずれにも便利なように日程を調整致しました。その鉄冶金シンポジウムは、実行委員会委員長として不破 祐東北大学名誉教授を煩わし、団長 R. G. Ward 博士 (General Manager, Research and New Technology, BHP), Sir Ben Dickinson (Advisor, Mineral Development, South Australian Government) 以下 19 名を迎え

てたいへん有意義であつたと思つております。私としては、これを契機に両学会が緊密な連絡を続けるよう願つております。

つぎに、第2回日本・中国鉄鋼学術会議を東京で開催し(近郊の大学、研究機関、工場などの見学を含む)、魏 寿昆団長(北京鋼鉄学院副院長)以下19名の使節団を受け入れました。その主題は、1981年9月の北京における第1回会議(当協会と中国金属学会の協定による)と同じく、製鋼の基礎と応用でありまして、当協会のルールにより私が実行委員会委員長を努め、所期の成果を得たと思つております。以上述べました4件の2国間交流につきご関係の各位に厚く感謝するとともに、煩雑かつ心労の多かつた業務を恙無く遂行された当協会事務局各位に深甚な謝意を表します。

なお、本年5月には第6回日独セミナーを受入れますが、当協会では森 一美名古屋大学教授を中心に準備を進めております。ちなみに西ドイツ側の対応機関はドイツ鉄鋼協会(VDEh, Ausschuss für Metallurgische Grundlagen: 委員長 A. Randak 博士)であり、本セミナーも10年の伝統を誇る段階に至りました。紙面の都合で意を尽くせない恨みもありますが、以上挙げた当協会研究活動の一端につき、会員諸兄のご理解を期待する一方で、合目的なテーマ選定など今後の方策についてご叱正、ご鞭撻をお願いしたいと考えております。